
ホットホットチョコレート

あぶらあげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホットホットチョコレート

【Nコード】

N5035F

【作者名】

あぶらあげ

【あらすじ】

男の子と女の子。微笑ましい日常。ですが今日は少し違うようです。

早朝から日が高い。

起きて3秒。

良く焼けた地肌に薄手のシャツをひっかけて、
短パンサンダル肩掛けかばん。

朝飯のフルーツを頬張りながら、

「いってきまあす」

男の子は今日も学校である。

「今日は、チョコをあげる日なのよ」

バス停で待ち合わせるのは、幼馴染の女の子。

学年の女の子の中で誰よりも背の高いその女の子は、外見も目立つ
が声もよく通る。

「おばあちゃんが言ってたの、昔は手作りのチョコをあげたものだ
って」

「なんだよそれ、聞いたことねーんだよ」

聞いたことがないどころか、馬鹿にした様子で男の子、あの男の子
である、は大声で返す。

かなりの大声だが周りは気にしていない。というかそれぐらいしないと聞こえないのだ。

朝のバス停は、人で渦なのだ。

「おばあちゃんがそう言ってたの、私も昔あげたって」

「おめえのばあちゃん、ぼけたんじゃないのか？　！！　いってー」

女の子が男の子を、いわゆるげんこつした。身長差から言ってほぼ真上からである。あれは痛いだろう。

「この馬鹿力女っ！」

これが、ふたりの日常だった。

しかし男の子は気づいていた。最近、げんこつがそれほど痛くない。昔のように真上から振り下ろされている感じがしないのだ。

事実、彼は成長期にあり、早熟の女性である彼女を、ごく近いうちに背も力も軽々と越えて見せるだろう。

男の子は痛みが和らいだことを素直に歓迎していた。しかし、やはり、同時に何か落ち着かないものも感じるのだった。何かが変わるとしているような、そんな予感。

痛みも治まり、男の子が頭をなでるのをやめると、女の子は意を決したかのようになり、それでいてつつけんどんに、

「だから、私も作ってきたのよ、はい」

男の子の胸に押しつけられたものは、はたしてチョコレートである。

「溶けるから、早く食べなさいよ」

確かにこの気温では、チョコレートなどすぐに溶けてしまうだろう。今日女の子の荷物がすこし大きかったのは、保冷剤とこのチョコレートの分だったらしい。

そんなことより、男の子はきれいにリボンなどで包装してあるそれを抱えているのが、なんだかたまらなく恥ずかしくなっていた。

「えー、おれいらないよ。朝から食べたくない。返す」

よく見もせず考えもせず、横に投げて返した。

「きゃっ」

それは女の子の顔にあたると、地面に落ちた。

乾燥した地面に落ち、砂まみれになった包みを見て、男の子はしまったとは思ったが、女の子を見たとき、完璧な後悔へと変わった。

彼女は泣いていた。

彼は、その時自分が何をしたのかを一瞬にして理解したのだった。

砂まみれの包みを拾う男の子。

女の子の頬には、すでに溶けていたのだろう、チョコレートがついていた。

男の子はそれを人差し指で取って、口に運んだ。

苦い。

「おいしくねーよ、馬鹿」

女の子は答えず、また少し泣いた。

もうすぐ二人は卒業式だ。

（後書き）

未来のバレンタインを想像しました。
温暖化の影響はこんなところにも笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035f/>

ホットホットチョコレート

2011年1月27日07時00分発行